令和２年度　国語科実践・研究計画

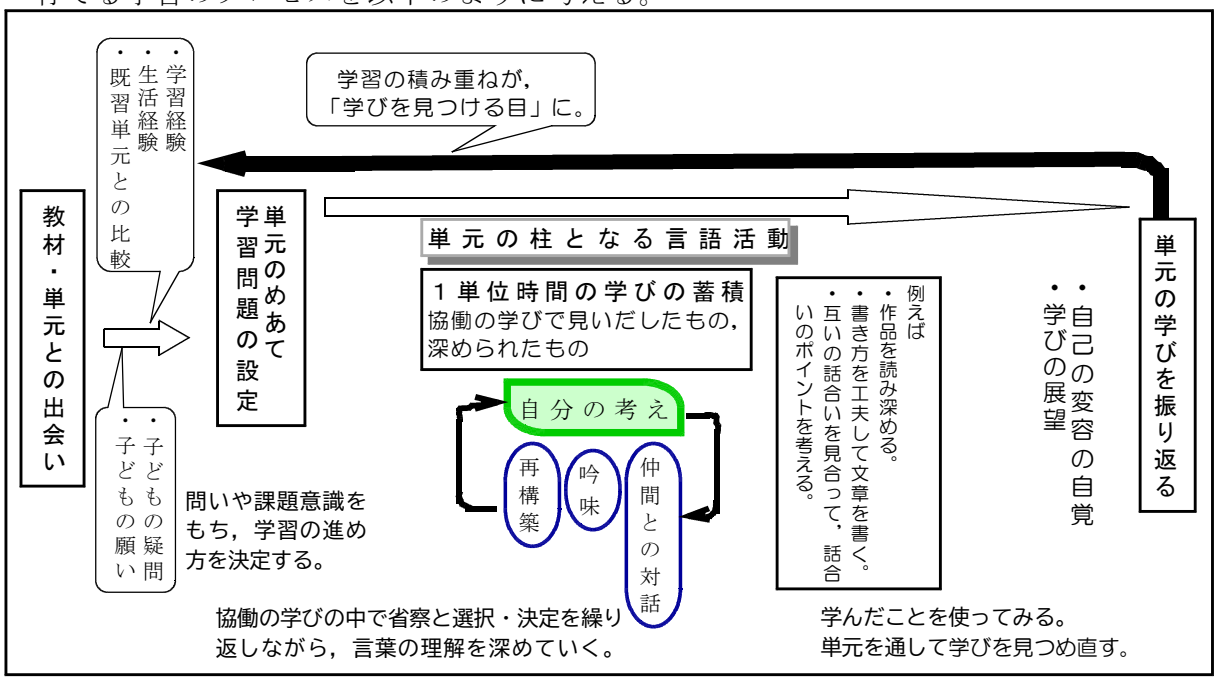
部　員	○鎌田　雅子，菅野　宣衛，小松田ひかり

研究テーマ
言葉の力を自覚し，言葉とよりよく向き合う子どもを育む学び

１　研究テーマについて

「話す」「聞く」「書く」「読む」日々の生活の中で繰り返される言語活動。言葉の使い手として，言葉の受け手として，私たちは立場を変えながら言葉と向き合っている。日常生活において，瞬間的，感覚的に言葉に関わることを考えたならば，国語科の学習の意義は，言葉の意味や効果の理解に基づく確かな言語感覚を得ることにあるのではないだろうか。学習の対象として言葉と向き合う中で子どもたちが言葉への知見を深めていく姿を期待し，３年次も「言葉の力を自覚し，言葉とよりよく向き合う子どもを育む学び」の研究テーマで実践を積み重ねていく。

国語科における「自律した学習者」を，これまでの生活経験，学習経験から言葉との向き合い方を自ら考え，言葉を適切に理解し，よりよく用いようとする姿と捉えた。また，「学びをつなぐ」を，これまで無自覚に使ってきた言葉の使い方，効果を自覚し，次の学習場面や生活の中で活用する姿と捉えている。国語科における自律した学習者を育てる学習のプロセスを以下のように考える。



～国語科　自律した学習者を育てる学習のプロセス～

２年次の研究では，領域や文種の違いによる学びの系統性を子ども自身が意識できる場を設けることが，既習を活かして学ぶ子どもの姿を引き出す手立てとして有効であることが分かってきた。また，解決したい学習問題に対するよりよい考えを見いだそうとする過程で，幾度も省察しながら学習を進めていき，最終的に自分はどのように考えるのかを思考し直すという学習の流れが意識化されることによって，より省察の精度が研ぎ澄まされていくことを実感した。

一方で，協働的な学びを活性化する問いを子ども自身が発するための手立てを探る必要が課題として見えてきた。協働的な学びの中で着目する言葉やその言葉の効果や意味といった省察対象が焦点化されたとき，深い学びにつながる「対話」が展開され，ねらいに迫る省察が行われていく。そして，協働の省察後に自分自身と向き合いながら行う選択・決定が更なる省察の場となり，省察と選択・決定を繰り返す学びのプロセスが言葉への知見を深める子どもの姿を引き出すのではないかと期待している。そこで３年次研究では，言葉を捉え直す省察とよりよい言葉の解釈や使い方を選択・決定しながら学習することの効果的な位置付けについて考えていきたい。

国語科で目指す「学びをつなぎ，資質・能力を高めていく子どもの姿」とは次のようなものである。

・言葉から受ける感覚と技法を関係付けて，言葉への理解を深めようとする姿
・根拠となる言葉を見付け，課題や問題に対する考えを互いに表現し合う中で新しい言葉の効果を見いだそうとする姿
・言葉の効果や言葉に着目した学び方を振り返り，単元を越えて活用する姿

2　研究の重点

(1) 言葉に関する「問い」を基に選択・決定し，追究し続ける単元構成の工夫

「どんな学習ができそうか」「どのように学習を進めるか」について子ども自身が考える場を設定する。その際，前年度の研究で成果として挙げられた，領域や文種の違いによる学習の系統性を子ども自身が意識できるようにする。

① 教材と出会う

子どもの言葉に関する疑問・願い（付けたい力）を基に，学習問題を考えたり，学習計画を立てたりする。学年が上がるにつれて気付きの段階が上がるよう，経験を積み重ねることを意識する。

② 言葉に対する問いを基に学習を積み重ねる

省察を繰り返しながら個々に学習を積み重ねていく。新たな「問い」や学びの到達度の自覚を基に，学習計画や学習課題を全体で見直したり選択し直したりしながら進める場とする。子どもが，新たな「問い」や焦点化された「問い」を生み出すことができるように，言葉に対する子どもの学びのプロセスを具体的にイメージしながら，学びの過程をデザインする。

③ 学びを試し，振り返る

協働の学びで見いだした答えを使ってまとめたり，作品として表現したりする。学びを次へつなげたり，個々の学びを確かめたりする場とする。

(2) よりよい言葉の認識や表現につながる，言葉と言葉とを結び付けて行う省察の工夫

① 着目する言葉に立ち止まることのできる言語感覚を養う

印象深い表現や言葉の使い方，その効果に対する認識を新たにしたり，無自覚だった言葉の使い方を自覚したりするためには，言葉を学習対象として認識する力が必要である。「なぜ，こんな書き方をしたのか」「普通だったらこんな書き方をする」など，単元を超えて用いることのできる言葉による「見方・考え方」を繰り返し用いる場を設定することで，着目する省察対象に子ども自身が気付くことができるようにする。

② 次第に「問い」を焦点化し，省察を深めていく工夫

これまでの研究で明らかになった，深い学びにつながる言葉との向き合い方には，次に挙げるようなものがある。子ども自身が学び方のよさを実感し，活用する中で，明らかにしたいことの明確化，焦点化が図られるようにする。

・考えの根拠として着目した言葉の差異を明らかにする。
・個々の考えを表現し合い，言葉の解釈を吟味する。
・ねらいに迫る発問を吟味し，教師が「問い」を発するモデルになって問い返しながら，「問い」を発する力を育てる。

時　期	主な研究・研修行事	研究・研修内容
１学期	・教材研究 ・研究の方向性の再確認 ・附属中学校公開研究協議会（中止） ・附属小学校公開研究協議会（中止）	・実践・研究計画の立案
２学期	・実践発表（8/27） ・文集「いちょう」編集・発行	・実践・研究のまとめ ・実践・研究計画の修正 ・研究会等の参加による研修と情報交換
３学期	・教材研究	・次年度の課題検討 ・次年度の実践・研究計画の立案

通年：教科部会，年間指導計画及び資質・能力表の加除・修正